

就学前教育支援センター 協働研究

杉並区立就学前教育支援センター／成田西子供園（研究実践園）

令和7年度協働研究主題

自然との関わりを通して 探究する幼児を育てるための環境の工夫

就学前教育支援センターでは、併設する成田西子供園と連携し、就学前教育の実践的研究を行っています。その成果を区内の就学前教育施設（幼稚園・子供園・保育所等）に発信することで、保育者の資質向上を図り、幼児の発達に応じた質の高い教育を推進することを目的としています。

はじめに

幼児は身近な自然に触れる中で、その大きさや美しさ、不思議さに心を動かされながら自然を取り入れた遊びを楽しむようになります。そして、好奇心や探究心をもって考えたことを自分なりの言葉で表現し、身近な事象への関心を深めていきます。自然と出会い、感動するような体験は、自然に対する畏敬の念や親しみ、愛情を育てるだけでなく、科学的な見方や考え方の芽生えを培う基礎ともなります。

幼児が育っていく保育環境として、自然豊かな園庭は大切です。虫や鳥がすみかとする多様な樹木や、季節ごとに変化する草花のある環境の中で、幼児はさまざまな生き物と出会い、自然の変化に気付き、感動し、ときには「なぜ?」という問いを抱き、答えを知りたいという思いをもつようになります。植物や動物を命ある存在として認識し、それぞれの生活に気付き、身近な小さな命を大切にしたいという気持ちも芽生えます。

このように自然との関わりは幼児にとって大切です。しかしながら、杉並区内の就学前教育施設のすべてが豊かな自然環境に恵まれているわけではありません。研究実践園である成田西子供園も、決して自然豊かな園庭とは言えない環境にあります。そこで、幼児がより身近に植物や動物に触れ、心動かされる体験を日常的に継続して得られるよう、園内の自然環境を工夫しながら実践を進めています。

本研究テーマ1年目は、栽培活動を中心に自然との関わりがより豊かになるような環境づくりを行いました。その実践研究の一部を紹介します。

土づくりから始めた保育実践 ～全学年の幼児が栽培活動に取り組むために～

<土づくり>

1 土の掃除

- ・園庭にあるプランターをひっくり返して土を広げ、根っこや葉、石などを丁寧に取除き、さらさらの土にする。二人組でふるいを使う5歳児もいる。
- ・日当たりのよい場所に土を広げて、日光消毒をする。

2 土壌改良

- ・土に腐葉土や肥料を混ぜてふかふかの土にする。



<保護者も一緒に、学年の枠を超えて園全体で土づくりに取り組むことで見られた姿>

- ★全園児が同じ場で一緒に取り組んだことで、自然に異年齢の交流が生まれた。
- ★土中に幼虫を見つけたら、古い根っこを「ラーメンみたい」と見立てたりして土に関わりながら遊び始めた。「何を植えようか」と、これからの栽培活動に期待を膨らませる姿も見られた。
- ★栽培活動に関心が薄い保育者や苦手意識のある保育者もいたが、みんなで土づくりに取り組む体験を通して、自然との関わりに関心をもつようになった。
- ★希望する保護者も土づくりに参加し、親子で植物の生長に関心をもつ姿が多く見られた。

ふかふかの土を使って、プランターと立ち上げ花壇の環境を設定しました。

おいしい畑

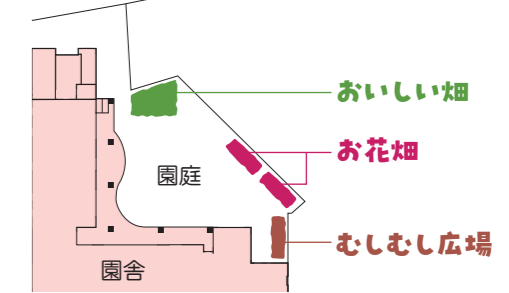
お花畑

むしむし広場

、子どもたちとそんな名前を付けて、栽培活動のスタートです。

探究とは五感で感じること

子どもたちの五感に働きかけるような環境に注目しました。見る、触れる、嗅ぐ、味わう、聞くなどの感覚的な体験ができるように、プランターと立ち上げ花壇を設定し、匂いのあるものや花が咲くもの、食べられるものを意図的に選んで栽培活動に取り組みました。以下は環境づくりの工夫から見られた具体的な実践事例です。



保育実践

味覚を刺激する

おいしい畑

ミニトマト・ナス・ピーマン・キュウリ・バジルなど

5月初旬5歳児 <野菜の栽培>

給食で食べたい野菜を学級で話し合い、苗を植える。苗の匂い、手触りから「何の野菜ができるのだろう。」と楽しみに世話を始める。



ミニトマトとバジルを隣に植えるといったら、お母さんが言っていた。

一緒に植えると野菜を食べる虫が来なくなるのかな。

保護者の土づくり参加をきっかけに、親子で栽培活動に関心をもつようになる。



ミニトマトの花が咲いた。

6月中旬5歳児 <バジルの収穫>

害虫対策や水分調整のため寄せ植えをしたミニトマトとバジルは葉と枝を大きく伸ばし、うっそうとしている。子どもたちは、「匂いを嗅いでバジルを見つけよう。」と言って、葉に顔を近付けて嗅ごうとする。「手で揉んだらいい匂いがするよ。」「パンパンって手に挟んでたたくといいよ。」と匂い方を伝え合う。



6月中旬5歳児 <バジルの収穫>

収穫したバジルは、給食でトマトソース煮込みに混ぜ込んで調理された。「すごくいい匂いがする。」と匂いを感じながら味わう。3・4歳児に「給食おいしかった。ありがとう。」と喜ばれ、誇らしさを感じる姿もあった。別の日には収穫した野菜でナスの味噌炒め、キュウリの塩もみを食べて野菜を育てる喜びを感じていた。



栄養のある土で育てたからおいしい野菜になったのかもしれない。

6月中旬5歳児 <コンポストに挑戦>

コンポストを使うことで生ごみを発酵・分解し土の栄養になることを保育者から聞いて、コンポストの堆肥づくりに取り組む。



袋が熱くなっている!

この前、土の中に入れたご飯つぶがなくなっている。どうしてだろう?

見る、触れる、嗅ぐ、聞くなどの感性を養う

お花畑

マリーゴールド・ペチュニア・パンジー・パタフライピー・赤シソなど

6月中旬5歳児 <色水遊び>

すり鉢とすりこぎを使って花から葉をすりつぶし、色水を繰り返しつくる。「きれいな色をつくりたい。」という思いから色水に使う植物を選んだり、水の量を加減したりして色の違いや濃淡の美しさを楽しむ。

ミントや赤シソなどの葉で色水遊びをする中で匂いの特徴に気づき、「こっちはどんな匂いかな。」「この匂いが好き。」と自分なりに表現する。



ペチュニアの花はすごくきれいな色が出る。



マリーゴールドの色がきれい。濃い色から薄い色が並んできれい。

6月中旬5歳児 <色水を凍らせる>

きれいな色水が翌日にはくすんだ色に変化することを体験した幼児が、「凍らせたならきれいな色水を取っておけるのではないか。」と思い付く。保育者と子どもたちは「試してみよう。」と色水を冷凍庫に入れて翌日を楽しみにする。

6月中旬5歳児 <色水を凍らせる>

色水はきれいな色を残していたが、周りは透明で中央に色が集まって凍っている。



色水を凍らせると真ん中に色が集まった! なんてだろう?



6月中旬5歳児 <色水を凍らせる>

他の花や葉の色水でも繰り返し凍らせてみるが何度やっても周囲は透明で中央に色が集まって凍ることを不思議に感じる。

6月中旬5歳児 <色水を凍らせる>

水をライトテーブルのせて光を通して見ると「とげとげの模様がきれい。」と氷の美しさを感じたり、氷の冷たさや溶けていく感触を楽しんだりする。



6月中旬5歳児 <虫との関わり>

偶然、パンジーの葉に虫を見つける。図鑑で調べるとツマグロヒョウモンの幼虫で、パンジーなどの葉を食べて育つことを知る。これまでの飼育経験をもとに、学級で幼虫を飼うことになる。



6月中旬5歳児 <虫との関わり>

しばらくすると幼虫は飼育ケースの中でサナギになる。サナギになった日の表示を付け、「いつチョウになるかな?」と楽しみにしている。

子どもが飼育ケースに表示を付ける
「6がつ19にちさなぎになる」

6月下旬5歳児 <虫との関わり>

10日後にツマグロヒョウモンが羽化し、飼育ケースから飛び立つ。子どもたちが見守っていると、チョウは花壇のパンジーに止まってから飛び立っていく。



やっぱりツマグロヒョウモンはパンジーが好きなんだね。

空の飼育ケースに表示を付ける
「6がつ30にちちょうになるパンジーがすぎ」

6月下旬5歳児 <チョウの表現>

ツマグロヒョウモンの飼育をきっかけにチョウの劇遊びが始まる。



10月中旬5歳児 <草木染>

色水づくりの経験をもとに、植物で布を染めることを保育者から提案する。子どもたちは興味をもって赤シソ、バジル、マリーゴールド、パタフライピーなどの染色に使う植物を摘む。



10月中旬5歳児 <草木染>

保護者に参加してもらい、植物ごとに鍋で煮だし、布を入れて染色する。

子どもたちは、鍋の中できれいな色が出る様子や布が染まる様子を見る。媒染剤による色の変化に驚いたり、一枚一枚の布が多様な色に染まる美しさを感じたりしている。

色とりどりに染まった布を運動会の装飾に使い、園のみんなで植物の不思議さや美しさを感じる。



生き物と触れ合う

むしむし広場

エノコログサ・ススキなど

5月中旬3歳児・4歳児 <ダンゴムシとの関わり>

偶然、ダンゴムシを見つけたことがきっかけになり、ダンゴムシを探す幼児が増える。見つけると自分の手のひらに乗せ、ダンゴムシが動いたり丸まったりする様子を面白そうに見る。



5月中旬4歳児 <ダンゴムシとの関わり>

毎日ダンゴムシを集め、「色が違うダンゴムシがいるね。」「足がいっぱいだ。」と、見たり触れたりしながら、気付いたことを話す。

5月中旬4歳児 <ダンゴムシとの関わり>

「ダンゴムシを飼いたい。」という声が上がると、保育者は腐葉土を入れた飼育ケースを用意する。「何を食べるんだろう。」という疑問をもった幼児がいたので、図鑑やタブレットで調べ、餌となる落ち葉や野菜くず(キャベツやニンジン)を入れ、見ている。

5月中旬4歳児 <ダンゴムシづくり>

紙や空き箱でダンゴムシを作りたくなる。「背中に模様があるの。」とうれしそうに言いながら紙にかいたり、「卵」と言ってお花紙を丸めて腹に付けたりする幼児もいる。

積み木を土や葉っぱに見立ててダンゴムシの住み家を作り、ダンゴムシの遊びが始まる。

ダンゴムシは土の葉っぱが好きだから寝ているんだ。

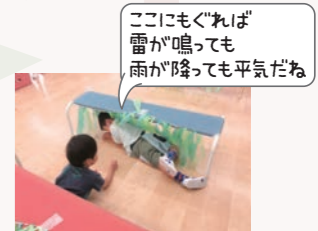


5月中旬3歳児 <ダンゴムシとの関わり>

保育者が保育室近くのむしむし広場をのぞき込んでいると、幼児も同じように草むらのをのぞき込み、ダンゴムシを見つける。ダンゴムシの動きがゆっくりしているのをつまみやすく、たくさん集められることを喜ぶ。ダンゴムシの丸まる動きを見ることも面白く、ダンゴムシ探しが続く。片付けの時間になると「また明日ね。」と言いながら、むしむし広場に戻す日が続いた。

5月中旬3歳児 <ダンゴムシになりきる>

ダンゴムシのお面を作って被り、四つ這いで動き回ったり、緑色のポリエチレンテープを草むらに見立てたりしてダンゴムシになったつもりで遊ぶ。他の幼児と同じようにお面を付けて動くことがうれしくなり、集って楽しむ。



ここにもくぐれば雷が鳴っても雨が降っても平気だね。



事例を通してわかったこと

幼児の探究活動は、「感じる」ことから始まります。当初は植物や昆虫に関わり、科学的な問いをもつ姿に注目しがちでした。しかし、事例を通して、幼児が遊びの中で探究する姿には、**対象そのものに関わる姿、対象を使って遊ぶ姿、対象になりきり同化して遊ぶ姿の三つの姿**があることがわかりました。

この三つの姿を支えるには保育者が正解を示すのではなく、幼児の感じる面白さや試行錯誤に寄り添うこと、幼児が自分で考えたり試したりしながら思考を深めていく時間をとること、幼児の実態を捉えて環境の構成、再構成をすることが大切であることがわかりました。

また、事例の振り返りから、幼児の気づきや不思議さに保育者が共感しながらも、受け止めて問い返す援助まで至らない場面があることにも気づきました。幼児の思いや言葉を受け止めるだけでなく、「なぜ?」という疑問から探究的な活動になるための、環境の工夫が今後の課題だと感じています。

事例から見られる探究の姿



対象そのものに関わる姿

【事例】

野菜の栽培 **おいしい畑**
虫との関わり **むしむし広場**



探究

対象を使って遊ぶ姿

【事例】

色水遊び

お花畑

対象になりきり同化して遊ぶ姿

【事例】

ダンゴムシとの関わり
チョウの表現

むしむし広場

お花畑

おわりに

土づくりから始めた今年度の保育実践を通して、保育者自身が自然に興味をもち、日々の保育に取り入れていくことの大切さを改めて実感しました。また、その時々幼児の興味・関心を起点とした偶発的な出会いを受け止め、共に楽しむことが遊びの豊かさにつながることも確認することができました。

自然環境への関わりは、四季の変化を保育者自身が感じ取り、長期的な見通しをもつことが重要です。その中で、子どもたちの好奇心から生まれる一つ一つの遊びは、発見や気づき、試行錯誤や振り返りを重ねながら、遊びを通じた学びへと深化していく姿が見られます。

来年度の2年目の研究では、幼児の主体性を大切にしながら、保育者が年間や季節を見通した意図性、計画性をもって環境を構成していきます。そして、充実した遊びの中で幼児と保育者が共に気づき、問いを深めながら探究的な学びが継続していくよう、保育実践を積み重ねていきたいと考えます。

ご指導いただいた講師 聖心女子大学名誉教授 河邊 貴子氏

研究実践園杉並区立成田西子供園 tel: 03-3311-3876

・園長: 齋藤 由美
・副園長: 小森 三奈子
・幼稚園教諭: 3歳児担任 荒田 陽菜
4歳児担任 金子 瑠夏
5歳児担任 渡辺 帆南
長時間保育担当 米田 知子
松田 陽

すぎっこひろば

杉並区立就学前教育支援センター
tel: 03-3311-3888